
My a Tail Online

銀臥

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

My a Tail Online

【Nコード】

N6188Z

【作者名】

銀臥

【あらすじ】

次世代VRMMO、『マイアテイル・オンライン』。

プレイヤーは液晶に映るゲーム画面で、コントローラーを持ってプレイするのではなく、ゲームの中に精神を移送し、ゲームの中に入って直接プレイすることができる。

そう大々的に宣伝したゲーム会社『ゼウス』は、日本、中国、アメリカ、イギリス、フランスの五ヶ国から、それぞれ一万人のベータテスターを選出し、してそのゲームをいち早くプレイしてもらうと宣伝する。

悪友達とノリで応募した中学二年生の主人公、四季町しきまち空人そらとは、偶然そのベータテストの枠に入る事が出来、夏休みの予定も特に決めていなかったで、そのゲームをプレイすることに決めた。だがベータテスト初日、彼らの世界は唐突に変わる。クリアするまで脱出は不可能。ゲームオーバーは死に繋がるというデスゲームと化した空人は、その過酷な現実を受け入れ、脱出のために異世界を剣士、『クー』として生きていく。

序章

『世界』というものは、それ単体では姿を変えることはない。変化するという事象には、それを変化させる何かしらの存在がある。

例えば、一億六千五百万年と長く続いた恐竜時代が滅びを迎えた原因だ。

恐竜達はそれまで当たり前のように暮らしていたが、それを唐突に終わらせたのは空から飛来した小惑星だ。

直径十キロメートル、重さ一兆トンもある隕石が地上に落下し、落下した時に放たれた核兵器数千個分の威力もある衝撃によって、大量の塵が舞い上げられ、空を覆いつくし、地球は氷河期を迎える事によって恐竜達は死に絶えた。

たった一つの隕石によって、地球という世界は氷の星へと変化した。

だがそれは、けして『世界』が自ら姿を変えたのではない。

一つの隕石によって、姿を変えさせられたのだ。

やがて氷河期が終わり、哺乳類が現れ、人類の起源が大地に二足で立ち上がり、知識を持って文明を作り上げていったのも、全て人類が行ったことであって、けして『世界』がそれに合わせて姿を変えたわけではない。

また自然にできた造形物も、大気や地形、太陽からの熱、重力、様々な力があるからこそ、姿を変える事ができただけであって、けして『世界』がそれを造形しようと思って造り上げたものではない。では『世界』というものを変えることが出切るものはなんなのか？私はここで思考と答えてみる。

思考というものは、すなわち人の考えだ。一人の考えによって、世界というものは姿を変える。

即ち、思考の数だけ様々な姿を持つ世界があるということだ。

私には思考がある。

それは私の中にも一つの世界があるということだ。

私が考えを変えない限り私の世界は決して変わることはない。

もしもここに新たな世界が誕生したとする。

その世界で、君達の中の世界は変わるのだろうか。

私は知りたい。

そのために、私は世界を作ろう。

どうか見せてくれ。

私が作り出した世界で君達は何を思い、何を感じ、何をして生き

ていくのか、どうか見せて欲しい。君達だけのMy a Ta

il（自分だけの物語）を。

それがこの世界を生み出した私のたった一つの願いでもある。

二〇五二年・一人の科学者の言葉

序章（後書き）

感想、コメント待っています。

第一話 いつもの日常

二〇五三年、七月二十日。

明日から夏休みだなー、と俺、四季町しきまち空人そらとはぼんやりと空を眺めながらそう思った。

ふと窓に映る自分の姿をしてみる。

その後で深いため息を吐く。

(うーむ、相変わらず見事なまでの童顔、もとい女顔……)

俺には、実年齢より幼く見られがちな傾向があった。

骨太さがあまり感じられない色白で華奢な身体。

中性的な線の細い顔立ち。

多少鋭さはあるものの、威圧的な雰囲気あまり感じられない両目。

多少はねっ毛があるものの、それでも大人しい印象が目立つ髪の毛。

初対面の人間が見れば、良くて年下の男の子。悪くて女の子。最悪で年下の女の子。ちなみにラストが一番多かったりする。

今年で十五になる思春期真っ盛りな俺にとって、一番のコンプレックスになっているのは言うまでもなかった。

はあ、とため息を吐きながら教卓の後ろで未だに夏休み中の注意を述べている教師を一瞥する。

今はLHRの時間だった。

夏休み前日の今日は午前授業で、終業式を終えた後はLHRで必須連絡事項を教師が伝えればまっすぐ家へと帰れるのだが、そのLRHが空人には今はやたらと長く感じられた。

普段なら一応、聞くには聞く教師の言葉なのだが、自分のコンプレックスを見た後の憂鬱な気分からすぐに脱却できるほど俺は器用

じゃないので、教師の言葉など今では耳障りなものでしかなかった。早く終わらないかなー、と不真面目極まりない思考で机に突っ伏した俺はこの時、気付かなかった。懐に入れていた携帯端末が震えていたことに。

ようやくLHRが終わり、悪友達に一言声をかけると、俺はすぐに外に出た。

今日は予定があるのだ。

外に一步出ると、熱波が襲いかかってきて俺の動きを止める……ぐっ、おのれ太陽め、ここは日本の北端に位置する北海道だぞ。もう少し日差しを弱くしてもいいだろうが……。

アスファルトで固められた地面の上を肌から沸きあがってくる汗を滴らせながら歩き、熱線を放射し続ける太陽を横断歩道で止まるたびに忌々しげに睨み付けることを繰り返しながら、ようやく目的の場所に到着する。

とある大学病院。

俺が住むこの街で最も大きな病院に俺は用があつたのだ。

別に俺は何か病気を抱えている訳ではない。

受付で手を消毒し、受付の人に挨拶を交わすと、そのままエントランスを過ぎ、階段を上って一つの病室の前へと立つ。

しき まちかなえ
四季町奏絵

俺の妹の病室だ。

三回ノックをしてからゆっくりとドアをスライドする。

白い病室の窓際に置かれたベッドの上で、点滴を打っている一人の少女が携帯ゲーム機を手に持って何やら難しそうな顔をしていた。

（ああ、またか）

俺は苦笑を浮かべると、手頃な位置に荷物を置き、室内に備えられているパイプ椅子に座ると、彼女のゲームが一段落するまでしばらく待ってやる。

俺の妹、四季町奏恵は気管支系の病気を患っており、そのせいで幼い頃から入退院を繰り返す日々を送っており、もはやこの病院に住んでいると言っても過言ではなかった。

現に彼女の病室は大量のゲーム機器で埋め尽くされていたのだから。

ちなみにこの大量のゲームを貸し与えたのは俺の母親である。

なんでも俺達の母親は、俺達兄妹二人を生む時まで携帯ゲーム機を手放さずに御産の痛みを耐えながらプレイを続け、ゲームをしなから出産を成功させた猛者だったらしい。

せめて妹だけはそんな不名誉極まりないものにはなって欲しくなaithinkingの切なる願いだった。

しばらく経つと、奏恵は達成感に満ちた顔つきになる。

どうやらゲームが一段落したようだ。

そのタイミングを見計らって。

「よう、奏恵」

声をかけた瞬間、奏恵はビクリと体を震わせ、すぐ隣に座っていた俺に視線を向けると同時に安堵し、すぐにハッとなると、今度は頬を赤く染めながら憎々しげな視線を向けてきた。

「何よ、あんたいたの」

「いたよ、三十分くらい前から。相変わらずゲームの事に関しては凄まじい集中力を発揮させるな」

皮肉を込めて言っただけなつもりなのだが、奏恵は今の言葉に対し、ふん、となぜか胸を誇らしげに張っていた。

「当然よ、どんなゲームでも一瞬の油断がゲームオーバーに繋がるの。このぐらい集中力はゲーマーには必須よ、必須」
「……あつ、そ」

皮肉をなぜか誇らしげな言葉で返されてしまい、母親と同じようにどんな妹が廃人ゲーマーとしての道を歩みつつあることに若干ながら頭を痛めつつ、俺は鞆の中から一つの箱を取り出す。

「ほら、いつものやつ」
「ん、ありがと」

箱を受け取ると、奏恵は嬉しそうな表情でそれを開ける。中には、バニラ、チョコなど数種類のクッキーが入っていた。

奏恵はクッキーを一つ手に取って口に運ぶと、幸せそうな表情を浮かべる。

その表情を見て、俺も笑みを浮かべる。

「うん、やっぱり美味しい」
「そりゃ、俺の愛情が入ってるからな。美味しいのは当然だ」
「ぶふっ！」

俺の言葉に耐え切れず、奏恵は思わずむせてしまう。

なにやってんだか、と呟きながら彼女の背中を優しくさする。一応の原因は俺にあるのだが、後悔はしていない。楽しいから。しばらくむせていた奏恵だったが、ようやく発作も治まってきたのか、キッと涙目で俺を睨む。

「あ、あんた何変な事言ってるのよ!」

「変な事じゃないだろ、料理をする上で愛情というものはとても必要なものなんだぞ」

「あんたが愛情とか柄じゃないでしょ!」

「それは認める」

「ならやんな! バカ兄貴!」

「ん? そんな言い方するのなら、次から作ってきてやらないぞ?」

「うっ、そ、それは……」

俺の言葉に奏恵は急にしおらしくなる。

その表情に俺は苦笑すると、冗談だよ、と言いながら彼女の頭を優しく撫でる。

俺の言葉に奏恵は心の底から安堵したような顔を見ると、すぐに顔を真っ赤にして顔をプイッと逸らす。子供扱いされて恥ずかしいようだが、それでもどこか安心してるところを見ると、俺なんかの手料理がいかに彼女にとって大切な物なのがよく解る。

そもそも俺がなぜこんな事をしているのかというと、奏恵が昔、病院食があまり美味しくない、と呟いたのを耳にしたのがきっかけで、その日から俺は奏恵にお菓子を作ってあげていた。

それだけでなく、少しでも奏恵の笑顔を見たくて、少しでも奏恵に寂しい思いをさせたくなくて、俺は三日も開けずに、妹の病室に顔を出してあげているのだ。

……俺って結構シスコンなんだな。

そんな解りきった事実思わず苦笑してしまう。

しかし奏恵の方はそれが少しだけ恥ずかしらしく、そのままポフッ、という音を立てながら横になってしまった。

妹の行動に肩をすくめつつ、ふとベッドの横に置かれた雑誌の表紙に書かれているロゴが目についた。

「マイアテイル…オンライン?」

なんだそりゃ、と口にしかけてふと思い出す。

マイアティル・オンライン。

世界初の次世代ゲームの名前である。

プレイヤーは液晶画面に映るCGを手に持ったコントローラーを使って画面上に映るキャラクターを操作するのではなく、『タラリア』と名付けられたゲームハードを用い、プレイヤーは肉体から意識を切り離し、その意識を仮想空間へ移送させる。

その仮想世界でプレイヤーは自らの意思で自由に体を動かすことが出来、ゲームの中で剣を振り回し、魔法を使う事が出来るという、世のゲーマー達の夢を体現させた究極のRPGと呼べるものである。しかし一つだけ問題があった。

この夢のようなゲームを実現させてくれるゲームハード『タラリア』なのだが…値段がもの凄くお高いのだ。

当然、一般庶民である俺達に手を出せる代物ではない。しかし。

（そういや、たしかベータテストの抽選をやっていたっけな）

この『タラリア』というゲームハードを開発した会社『ゼウス』は、日本、アメリカ、中国、イギリス、フランスの五力国から一人ずつ、計五万人のベータテスターを選出して参加してもらう、と大々的に発表してきたのだ。

仮想空間で遊べる。

そう大々的に宣伝した『ゼウス』に対して応募が殺到したのは言うまでもない。

俺自身、悪友達とこの話を聞いた時に悪ノリのような物で手に持っていた携帯端末でベータテスターに応募したものだ。

「なあ、奏恵はこれに応募はしたのか？」

奏恵の事だから、きつと応募くらいやったんだろうなと思って質問してみたのだが…。

「…してない」

「へっ？」

予想外の返答に空人は思わず固まってしまった。

ゲーム廃人の道を着々と歩み続けている奏恵の事なのだから、この夢のゲームを体感できるベータテストには、きつと参加すると思っていたのだが…。

「あたしは今入院してるし…もし当たっても…今の体じゃ…」

「あつ……」

そこまで言われてようやく気付く。

奏恵は気管支系の病気を患っていて、そのせいで外出もままならない状態だ。

常に薬を点滴していなければいけないし、寝る時には呼吸器を付けないと危険な状態に陥ってしまう程、彼女の体は悪い。

「…悪い」

無神経な言葉をかけてしまった事に、俺は申し訳なさと同時に、自分の無神経さに腹が立つてくる。

「ううん、兄貴があたしの事を気遣ってくれてるのは解るから、大丈夫」

奏恵は優しく微笑みながら俺の手にそつと自分の手を重ねてきて

くれた。

「そっか…ありがとな、奏恵。おかげで元気出た」

優しく微笑みながら俺はそつと奏恵の頭を撫でる。短く切られた栗色の髪の毛を櫛で梳かすように、優しく、優しく撫で続ける。

「こっちも…いつも、ありがと」

後半に行くに連れ、消え入りそうなぐらい低い言葉で礼を言う奏恵。

恥ずかしがり屋な妹に苦笑しつつ、ポンと頭を軽く叩くと、ふと時間が気になって懷から携帯端末を取り出してみる。

「ん？」

デスクトップを開くと、そこにはメールが届いている事を知らせる手紙のアイコンがあることに気付く。

誰だろう、とメールを開いて…固まった。

「兄貴？」

訝しげな声を上げる奏恵の声に反応し、俺は見間違いではないのか、ともう一度メールの内容を確認する。

何度確認しても内容は同じだった。

「……………当たった」

「はっ？」

「マイアテイル・オンラインの募集に…当選した」

「えっ……………」

えええええええ！？と病室に妹の驚愕の声が響き渡る。

耳が思わずキーンとなってしまうたが、その事を指摘する前に奏恵は俺の手から端末を奪い取ると、メールの内容を確認する。

「……本当だ……嘘みたい……」

「俺も嘘みたいだ……信じられねえよ」

しばらく二人して携帯端末に映るメールの内容に驚愕していたのだが、少しずつ落ち着いてきたのか、深呼吸を繰り返して俺達は向かい合うように座る。

「……で、これどうする？」

「どうするって……行ってくればいいじゃない。兄貴、行きたくて応募したんでしょ？」

「いや、そりゃ行きたいけど……」

どこか歯切れが悪い俺の言葉に訝しげな視線を向ける奏恵。そしてはぁ、とため息を吐く。

「兄貴、ひょっとしてあたしに遠慮してない」

「…解っちゃうか」

「そりゃ解るわよ」

そっか、と俺は苦笑する。

さすがに何年も一緒にいる妹なので、肉親の心情など、すぐに解ってしまうのだろう。

「お前が入院してるってのに、俺だけ遊び呆けるなんて、少し気が引けてな……」

「なら、どんな感じだったか教えて…楽しみにしてるから」
「…奏恵……」

奏恵の言葉に、決心した。

妹のお願いなら、断る訳にはいかないからな。

「解ったよ、どんなだったかしっかり体験してくるぜ！」

「楽しみに待ってるよ、兄貴」

さて、そう決まったら早速必要な物の準備だな。

夏休みの予定はどうしようか迷っていたところだったから、調度いい。この際だから楽しんでくるとしますかな。
だがその前に。

「……………お袋をどうやって説得するかだな」
「……………その、頑張りなさいよ」

ああ、頑張るさ……あの超廃ゲーマーの手からなんとしてでも、このベータテスターの抽選メモリを守ってみせる！

第一話 いつもの日常（後書き）

感想、指摘等、お待ちしております。

OUT「現実」 IN「仮想世界」

プシュー、バスのドアが気体を噴出させたかのような音と共に開かれる。

バスの中に乗っていた乗客、俺と同じ『マイアテイル・オンライン』の抽選に当たった、ベータテスター達が、ツアーガイドのお姉さんの後ろに続いて、ぞろぞろとバスを降りていく。

「やっと着いたか……」

愚痴を零しながら、俺はバスを降りる。

降りた瞬間、涼しい快適な車内の空間から一転、灼熱の熱帯空間となって俺に襲いかかってくる。

おのれ太陽、お前はなんでそう毎日毎日燃え続けてるんだよ。少しはcoolになることを覚える。熱いだけじゃ世の中渡っていけないんだぞ……って、太陽に向かって俺は何愚痴ってたか……。

はぁ、とため息を吐きながらガイドに従ってビルの中に入り、エントランスから各フロアを通って行くと、何やら劇場のような広々とした空間に辿り着いた。

ただ劇場と違うのは、椅子がスラリと並べられているのではなく、巨大な卵型のカプセルが何十台も設置されていた。

「あれが、タラリア……」

どこからか、夢でも見ているかのような口調で呟いたのが聞こえた。

次世代ゲームハード、タラリア。

ギリシャ神話に登場する、空を飛ぶ事が出来る黄金の翼が着いたサンダルの名を冠したゲーム機器。

テレビででしか見る事のなかった物が、今、目の前で、それも手の届く位置にあるとなると、ゲーマーとしては、感無量といったものがあるのかもしれない。

そこまでコアなゲーマーではない俺も、これから加速世界へと導いてくれる機体を目にして、どこか抑えきれないような感情が内側から込みあがってきているのを感じていた。

「それではみなさん、一度服を着替えてもらいます」

は？着替える？

「なぜ」と思ったが、俺が質問する前に、ダイバーなどが着るような上半身と下半身の一部を隠すようなピッタリとしたウェットスーツのようなものが手渡される。

訳が分からず、それでも着替えないといけないようなので、俺は更衣室に向かおうとしたのだが……。

「おっ、お客様！どこに入ろうとしてるんですか！？」

「へっ？」

何やら女性のスタッフが、更衣室に入ろうとした俺に向かって慌てて駆け寄ってくる。

一体どうしたんだ？

「そちらは男性用の更衣室です！お客様は、こちらです！！」

「はっ！？ちょ、待て！俺は！！」

弁明をする前に俺は女性スタッフに腕を掴まれ、必死の抵抗も空

しく、俺は女子更衣室の中へと連れて行かれた。

入った瞬間、服を脱いでいる途中の女性やら下着姿の女性やら、すでに裸になっている女性の姿などが目に入ってくる。

マズイ。

これは確実にマズイ。

精神的な意味でも、社会的な意味でも、肉体的な意味でも、道德的な意味でも、とにかく色々マズ過ぎる。

当然のように俺はその場から逃げだした。

後に俺を女子更衣室に拉致したスタッフに俺は男である事を説明すると、スタッフの方は「いや、方々はもの凄い驚きを見せていた。ちくしょう、どこでも俺は男扱いされないのかよ……」。

まあ、いいものが見れたから、少しだけ許してやるとしよう。

……さて、なんで俺達がこんなピツタリと体にフィットするような服を着せられたのかというと……その理由はタラリアの中に入ってから解った。

タラリアの中に入ると、中に入ったのは、表面にぬるりとしたジェルで出来た椅子があり、座るとひんやりとした感触と共に、ぬるぬると全身にジェルがまとわりついてくる。

たしかに私服を着たままでは、このジェルシートに座るのは無理があるだろう。というか、嫌だ。

しかし何でこんな仕様にしたのだろうか？

その問いには、すぐにスピーカーから洩れてくる声が答えてくれた。

『このジェルシートは、ゲームの中にダイブした時、プレイヤーが感じる感触や神経等などの感覚器官をクリアにするためのものです。不快では有るでしょうが、ゲームの中にログインすれば、その感覚も無くなりますので、ご安心を』

なるほど。

たしかゲームの中では、現実世界にいる肉体の感覚はカットされ、

代わりに仮想世界にいる俺達の肉体へと、感覚が行くようになって
いるんだっとな。

向こうの世界では、物に触ればその感触が、熱が、重量が全て
感じ取れるらしい。

物が触れた情報を、脳へと移行する時に、それらを効率的に感じ
取れるようにするために、このシートが役に立つ…ということらし
い。

その事に感心しつつ、目の前にゲームのチュートリアルが流れ始
めた。

流れる内容は、主にゲーム内で使われるシステムの概要…例えば、
メニューの表示の仕方とか、ゲーム内で扱うスキル等の使用方法と
か…そして。

『貴方の種族を選んでください』

「種族？」

首を傾げながら見てみると、画面上に五つの種族『ヒューマン』、
『エルフ』、『フェアリー』、『ホムンクルス』、『ドラグーン』
の名称が表示された。

なるほど、RPGとかでよくある種族決め、という奴か。種族ご
とに各能力が異なるみたいだし、習得スキルとかも違うのかもしれ
ないし、容姿も種族ごとに異なっているみたいだ。

エルフは長くとがった耳を持った姿に綺麗な姿をしていて、フェア
リーはエルフみたいに長くはないが、とがった耳と、何より背中
に半透明の羽が生えている可愛らしい容姿をしていた。

ホムンクルスはヒューマンと大して変わりのない容姿をしていた
けど、体の一部に紋様のようなものが浮かんでいた。

最後にドラグーンだが、本来耳が付いている場所から、魚のひれ
のようなものが生えていただけだった。

……なんというか、フェアリー以外、ほとんどただの人間に何か付け加えただけのような感じの物だった。

とはいえ、一応俺の分身となるものなのだから、真剣に考えておく。

「森の住人エルフ…なんて俺の柄じゃないし、フェアリーも俺の柄じゃないから…やっぱ無難にヒューマンかな？」

そう呟きながら、俺はパネルをタッチして『ヒューマン』を選択する。

『では、次にあなたのアバターの名前を決めてください』

チュートリアルが終わり、一息つくと、スピーカーから指示が流れ出す。

「名前か…何にしようかな」

現実世界と同じに…いや、これは不特定多数の人間がいる空間だ。どんな思考を持っている人間に出会うのかも解らないし、本名は避けた方がいいかもしれない。

そうなる何にするか迷う。

何せ呼ばれるのは画面で動くキャラクターなどではなく、俺自身だ。

現実と違いすぎる名前というのも違和感があるからどうかと思うし…ここは本名からもしった方がいいかもしれない。

「ええっと…四季町だから…s i k i…いや、これはダメだな」

本当に何にするかな…名字はやめて、名前から取るとするか。

空人だから…空…sky…いやいや…人だから…human…アホ
か俺は……。

うーむ…空、空…くう、くー…C^クou……。

「よし」

俺はパネルに『C o u』と打ち込むと、そのまま少し待った。

『それでは最後に、ヘッドギアを装着して、ゆったりと椅子にもた
れかかって下さい。あとは機械が貴方がたの意識を、仮想世界へと
潜行してくれます』

スピーカーの指示に従い、椅子の上部に備え付けられているヘッ
ドギアを頭にかぶる。その後に、椅子にゆっくりと楽な姿勢で座る
と、次第に意識がゆっくりと闇に落ちていく感覚が襲い掛かってく
る。

『それでは、ゲームスタートだ…健闘を祈るよ、プレイヤー諸君』

どこか期待が込められたような声を聞きながら…俺の意識は、闇
に落ちた。

「んっ……」

意識がゆつくりと覚醒され、俺は目が覚める。

気がつけば、俺はどこかの草むらの上に横たわっていた事に気付く。

ゆつくりと立ち上がり、辺りを見渡してみると、そこには石畳で造られた道や、レンガなどを重ね合わせて造り上げられた、現代ではまず見る事のないような建造物が建っていた。

そこまで見て、ここがどこなのかようやく気付く。

「ここが…マイアテイル・オンラインの世界なのか……？」

信じられなかった。

目の前に広がる広大な草原。

頭上に広がる蒼穹。

頬を撫でる風の風圧や、風でなびく髪の毛の感覚、草むらの葉が擦れる音など、何もかもが現実世界のものとは変わらないように感じていた。

「すげえ…これが本当に仮想世界だなんて思えねえ……」

ためしに近くにある石を触ってみると、表面のゴツゴツとした触感や、ひんやりとした温度が伝わってきて、手に持ってみると、たしかな質感がそこにあった。

何もかもが現実と酷似している。

けれど違うところも多々あった。

まず一つ目なんだが…。

「なんだ、この格好は……」

近くにある噴水の水に映る俺の姿。

俺の格好なのだが…白いジャケットに黒いジーンズという組み合わせ

わせだった。現代風のファンタジーものの格好といえいいのだろうか。

問題なのは、俺の容姿だ。

俺の容姿は現実世界とまったく変わり映えのないものだった。

しかし俺の髪の色と目の色が変わっていた。

髪は炎のような紅蓮の色彩を持った、艶やかな長髪になっていて、瞳の色は夜空に浮かぶ満月のような、黄金の色へと変化していた。

「うわっ、これが俺か？なんていうか、二次元とかでしか見られないような姿になってるぞ……というか……」

さらに髪の色が現実世界の姿より背中に届くぐらい長くなっていて、前よりも女の子っぽい雰囲気が出ていた。

たしか髪型や目の色などは、その人に似合うものをゲームシステムが選んでくれるってチュートリアルで言っていたような気がするが……こんなもの迷惑以外の何物でもないぞ、ゲームシステム！ただ自分で見ても似合っていると思ってしまうから腹が立つ！ちくしょう、俺はゲームの中でもこんな扱いなのか！！

俺は怒りと、自分が思わず口にしてしまった言葉にしばらくその場で悶えていた。

……しばらくお待ちください……

……だんだんと空しくなってきた、俺はゆっくりと立ち上がって噴水に映る自分の姿を確認する。

……可愛いというよりは、クール系の顔だというのが唯一の救いなのかもしれない。スズメの涙程度の救いだけ……。

だがそこで、一つの疑問が頭に浮かんできた。

「まさかゲームのシステムにも、俺が女だっと思われてるんじゃない…」

冗談で呟いてみるが、段々と不安になってきて、思わずメニュー画面を開いて確かめてみる。

「えっと…たしか右手を宙に上げて、人差し指と中指を立てた後、横にスライドさせる…だったよな」

ぎこちない動きで指を横にスライドさせると、ポン、というピアノのような音と共に、目の前に青い水晶のようなカラーで浮かび上がる四角形のメニュー画面が現れる。

「おお、すげえ……さてと、ステータス、ステータス」

一瞬だけ感動したが、その後すぐに『STATUS』と表示されているパネルをタッチする。

N A M E C o u 『 クー 』 L v 1 m a l e

『 M a l e 』…つまり、男。

「よ、良かった……」

言葉と共に、俺はその場に座り込んで、長いため息を吐く。

多分、生まれて初めてといえる程、俺は心の底から安堵したと思う。安心はしたが、それならばなぜこんな姿にしたのか、とゲームシステムに問いかけてみたくなるが…まあ、それは置いておく事にしよう。

さて、一安心したところで…。

「いつちよ、戦いに行くとしますかな！」

俺は『ITEM』と表示されているパネルをタッチし、さらに『EQUIP』と書かれているパネルをタッチし、アイテム欄に表示されている中に入っている装備アイテムを一瞥していく。

えつと武器アイテムは…『木刀』、『ウッドランス』、『ウッドロツド』、『ウッドアックス』…って、ほとんど木製じゃねえか……。しかも剣だけなぜか『木刀』って日本語表示だし…………。

「まあ、いいか…」

俺はメニューの中から『木刀』を選ぶと、人型の形になっている部分にスライドさせる。

スライドした木刀のアイコンが人型に触れた瞬間、俺の手の中に木刀が現れる。

「おつ、すげえ本物の木刀みたいだ…でも、なんか修学旅行の土産屋にあるようなものみたいだな…………」

なんつー貧弱な装備だ…………まあ、初期装備なのだから仕方ないか。木刀を腰のベルトのホルスターに下げると、俺はそのまま町の外へと駆けだしていった。

これから始まる、冒険の予感に期待を膨らませながら…………。

O U T＝現実 **I N**＝仮想世界（後書き）

感想、指摘、待っております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6188z/>

My a Tail Online

2011年12月28日13時52分発行